

『稿本天理教教祖傳』第7章の冒頭に、

教祖は、八十の坂を越えてから、警察署や監獄署へ度々御苦勞下された。しかも、罪科あつての事ではない。教祖が、世界たすけの道をお説きになる、ふしぎなたすけが拳がる、と言うては、いよへ世間の反対が激しくなり、ますへ取締りが厳しくなった。しかし、それにも拘らず、親神の思召は一段と弘まって、河内、大阪、山城や、遠く津々浦々に及んだ。とあります。

そこでまず、この第7章に述べられている時期(明治11年～14年)に、どのような不思議なたすけが拳がったのかを、『稿本天理教教祖伝逸話篇』から抜き出してみます。

1. 一の道具を蛭に噛まれて半年以上も治らなかつた男の子の父親が「父親付きで参れ」との教祖のお言葉に従つて、父子でおぢばへ帰つたら、男の子がたちまち全快のご守護を頂いた。
2. 26日には「待つ理」で祭典の準備以外のことはしなくてもよい、との教祖のご指示に背いて、お付きの女性がその日の朝に他の仕事をしようとしたところ、俄かに盲目になってしまった。それでご命に副わなかつたお詫びをしたら、元通りに目が見えるようになった。
3. 重い眼病を患い医者の手余りになつた父親を背負つて、3里の山坂を越えておぢばがえりをした。「親孝行に免じてたすける」とのお言葉を頂き、1カ月あまりの滞在で全快のご守護を頂いた。
4. 「をびやゆるし」を頂いた婦人が、産気づいた時に誰もいながつたが、誰の世話にもならず安産させて頂いた。
5. 持病の胃病が悪化して危篤状態になつた少年が、戸板に乗せられておぢばがえりをした。教祖が召しておられた赤の肌襦袢を頭から着せて頂いて、1週間のおぢば滞在で全快した。
6. 病弱のために、6年間麩を常食にして暮らしていた青年が、神様のお話を聞かせて頂いたその日から、一時に鰯を30匹も食べられるようになった。
7. 豪雨の中を大阪から病の娘を連れておぢばがえりをして、教祖からお言葉を頂き、お紙を貼つて頂いて、全快のご守護を頂いた。
8. 坐骨神経痛で手足の自由を失つた男性が、おぢばへ帰つて教祖から頂いたお水を「なむてんりおうのみこと」と唱えながら痛む腰につけていると、3日目には痛みがなくなつた。
9. 突然眼病にかかり失明寸前になつた人が、隣家に住む人の3日3夜のお願いで鮮やかにおたすけ頂いた。
10. 5年余りも足腰が立たずに寝たきりだつた人や、7年余りも盲目だつた人が、神様のお水でおたすけ頂き評判になつた。
11. 歯の根に蜂の巣のような穴が開いて泣き暮らしていた婦人が、茶碗に水を汲んで「なむてんりおうのみこと」と唱えて頂くと、たちまち痛みが鎮まり全快した。
12. 7人の子供の中5人までを亡くした夫婦が、長男の熱病をたすけて頂いた。また、その妻が乳の出ない母親の子

供を預かつたところ、不思議にお乳が出るようになった。

13. 娘が眼病、息子が俄かに口がきけなくなつて、母親がお屋敷に入り込む心を定めたら、子供たちは鮮やかな御守護を頂いた。
14. 教祖がお居間からおつとめの扇で呼び寄せられて、北海道沖で海難にあつた人をたすけられた。
15. 眼病で失明寸前の娘が、母親の片目をかけての願い通りに、娘の片目が見えるようになった。

このようなおたすけ話に加えて、教祖の千里眼や、ただならぬ身体能力や力の強さなどの話が数編載っています。

これら逸話篇に載せられたものは、確たる記録が残された話だけです。地方の教会に残る多くのご守護談から類推すると、実際には、逸話篇に載っていない幾10倍もの不思議なたすけが各地であつたと考えられるのです。ですから、その頃にお道の教勢が飛躍的に伸びたのも当然だと思つてあります。

しかるに他方、普通に考えれば、このような不思議なたすけが拳がつても、それが即世間からの反対につながるとは思えないのです。たとえば、逸話篇に出てくる教祖にたすけられた人たちのほとんどは、おぢばに引き寄せられる前に、あつちこつちの医者や祈禱師などに頼つています。けれども、それでたすけられなかつたので、教祖におすがりしてたすけて頂いたのです。ですから、医者や祈禱師などが、自分たちの“手余り”をたすけられた教祖に、多少は嫉妬するようなことがあつたとしても、自分たちのお客を取られたとまで考える必要はなかつたと思われるのです。また、当人の家族や親族にしても、種々手を尽くしてもどうにもならなかつた病氣などをたすけて頂いたのですから、そのことを喜びこそすれ反対する理由はまったくなかつたはずなのです。

では、なぜふしぎなたすけが拳がるにつれて世間の反対が激しくなり、官憲の取り締まりが厳しくなつたのか。それは、たすけられた人たちの感激が大きく、そのご恩報じをすることを他の全てに優先するようになったからだと思つてあります。においがけ・おたすけ一神恩報謝を実行することに夢になつて、自らの家庭のことを顧みない人たちが続出した。それで生活の基盤を脅かされる恐れが出てきた家族が反対した。そして、そういう家族の影響を受けかねない親族が反対した。さらには、そういう非生産的な活動をして家業をおろそかにする人たちによって、社会秩序が乱れることを恐れた村人たちが反対した。また、そういう既存の社会からはみ出る人が多くなって、自分たちの権威が失墜することを恐れた官憲が、自らの面子を守るために強引に取り締まるようになった、ということだと思つてあります。

しかるに、当時の道の多くの先達たちには、そういう諸々の反対攻撃をさらなる信仰のエネルギーに転化できるほどの熱烈な信仰体験があつた。それで、教祖への不条理な迫害・世間の反対攻撃が大きな熱源になり、教祖が80の坂を越えられてから道が大きく伸び広がつたのです。この教祖が高齢になられてからの道すがら一我がことを忘れて報恩の道を突き進んだ多くの人たちを輩出した熱氣一老若男女全てのようぼくが揃つて奮い立つた状況を、いかにして現代に再現するのか。それが、教祖130年祭後の今問われていることだと思つて次第です。